

ポスター発表

中国の若年層における扶養意識・葛藤

—

○ 関西学院大学大学院人間福祉学研究所 張 男

陳 礼美 (関西学院大学大学院人間福祉学研究所・007060) 若者 扶養意識 葛藤

1. 研究目的

現在、中国では平均寿命が延び、高齢者の人口が増加している。一方、1979年より「一人っ子政策」という人口抑制政策が実施されてから若年層の人口は減少し、自身の親の扶養に関して不安や葛藤を抱くのは必然的なのではないかと考えられる。本研究では、中国の①若年層の扶養意識、②葛藤の有無、③社会に対する希望の有無・内容を調査し、現状を把握する。①～③に共通し、性別や兄弟の有無などの属性によって何らかの傾向があるのかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

研究の視点：本研究では、親への扶養が義務化されている中国では、若者たちが扶養責任に対して不安や葛藤が生じていないか、つまり不安や葛藤の有無を調べる。もし不安や葛藤がある場合、どのような若者たちにその傾向が強いかを調査することが研究の最大の意義であり特徴である。

研究方法：2013年10月9日～10月10日にT大学の全学部生を対象に質問紙を配布し、その場で回収した。

3. 倫理的配慮

調査票は無記名とし、調査委への参加が個々の任意となるよう、研究内容や研究成果の活用方法に関する説明と自由な意思決定による研究参加に関する説明からなる研究協力依頼の文章を質問用紙とともに個人に配布した。そして、研究参加を自己決定した者のみに回収への提出を求めた。

4. 研究結果

中国の大学生502人に調査を依頼して、有効回答数は497人(99%)であった。基本属性において、性別では男性は162人(33%)、女性は335人(67%)であった。年齢では、範囲が17歳から30歳までであった。兄弟姉妹の有無については、兄弟姉妹がいない学生は223人(44.9%)、兄弟姉妹がいる学生は267(53.7%)、と不明7人(1.4%)であった。

①若年層の扶養意識：男女とも、親を経済的・身体的に「扶養は義務である」「自分が扶養する」に関して、同意する人が9割強という圧倒的な意識の高さであった。「親の身体介護が必要な時、私は親を扶養するつもりだ」について、「非常にそう思う」と回答した兄弟姉妹ありは165人(62.5%)で一人っ子は110人(49.5%)となった。この結果から、一人っ子よりも兄弟がいる回答者の方が、「自分が親を養う」と考えている人が多いことが

分かった。

②葛藤の有無：「何か理由があれば、親が身体介護を必要とした時、施設等への入所もやむを得ない。」に関して、「そう思う」と回答した兄弟姉妹ありは79人（29.9%）で、一人っ子は82人（36.9%）であった。「身体介護が必要な時、私は親を施設入所させるかもしれない。」という問いに関して「そう思う」と回答した兄弟姉妹ありは43人（19.3%）で、一人っ子は78人（30.2%）であった。

③社会に対する希望の有無

「社会が経済的扶養を保障すべきだ」について、「そう思う」と答えた男性は97人（60.3%）、女性は265人（50.2%）である。「社会が身体的扶養を保障すべきだ」について、「そう思う」と答えた男性は81人（50.0%）、女性は156人（47.1%）である。「経済的扶養であれ、身体的扶養であれ、男性が女生より少し社会への期待していることが分かった。

5. 考察

中国の若年層の扶養に対する意識は高いことが分かった。それは「子は親を養うべき」という中国思想が今でも世間一般に浸透していると考えられる。さらに中国では「高齢者権益保護法」によって子どもがその親を扶養することを国が義務付けており、国が公的な扶養の役割を担うのではなく、家族や親類によって行われる私的な扶養の形が一般的に浸透していると言える。しかし、本研究では「親の身体介護が必要な時、私は親を扶養するつもりだ」について一人っ子よりも兄弟がいる回答者の方が、「自分が親を養う」と考えている人が多いことが分かった。それは、一人っ子は家庭の中ですべての愛をもらって育てているので自分自身しか考えない傾向にあるのではないかと考える。一方で、兄弟姉妹がいる人は育ってきた環境が一人っ子とは違い、兄弟姉妹への感情があり、配慮があり、他人の立場から物事を考えることができ、家族への奉仕精神がより強いのではないかと考えた。今後の課題としては、一人っ子の若者と兄弟がいる若者の扶養意識の違いについて研究をすすめたい。